

山と博物館

第13巻 第1号 1968年1月25日

大町山岳博物館



あけましておめでとうございます。

新春を迎え又気持の上においてもあらたな一ページを加えた訳であります。昨年をふりかえると、数々のことが思っておこされます。カモシカにおいては三頭も自然保護受入れされ、あわせて、六頭となった。然し何れも老衰で、次々と、死亡し終には以前より飼育されていた三頭に、なった。又コブ白鳥は、三羽ふえ現在すくすくと、成長しております。さて、最も当館において力を入れ、そして巷の人々の関心を、よせていた特別天然記念物ライチョウですが、ふか後約二十五日にして、六羽全部死亡したこと、ほんとうに残念でした。然し一方映画「特別天然記念物ライチョウ」は、国の内外において受賞この映画の製作に、加わった当館としては、この上ない、よろこびを感じて居ります。

さて又本年も特天ライチョウの保護増殖事業の実施については、種々の声が巷よりあり実施か中止かの岐路にたちましたが、本年こそは、の決意によりふみきりをつけました。

この間、遠く又近くの方々より、お叱り又は励しのお言葉をいただきましたが、何れにいたしましても、この事業に多数の方々、多大なる関心をよせておいであることを思うと、ただ成功させねばと、この一念につきます。

思うと過去五カ年に渡って失敗して来たその中に、又今後における貴重なデータがあり、これが又成功の要素となるものと確信いたして居ります。

過去をふりかえってみると限定された事業経費の中に、制約された無理な面もありました。これ等の点も本年度に於ては、大いに緩和されより規模の大きな事業に反映されることと思えます。何卒各方面の方々におかれましては、あたたかくこの事業の成功を、見守りいただきたく切にお願い申し上げます。

年頭にあたり特に全館をあげての事業を前に初信をのべさせていただきます。

(館長・成沢祥人)

モグラの生活

今泉 吉晴

モグラはユニークな動物である。この地球上には、いろいろと変化に富んだたくさんのお家があるけれども、モグラの棲んでいる地中ほど私たち陸上生活者にとってなじみのうすい場所はない。モグラは、長い時間をかけて、そこに生活の場を確立した。モグラの体形は、その生活をよく反映している。

モグラには眼がない。くらやみのトンネル生活では、なくても生きてゆけるからなくなったのだ、という説もある。けれども、おそらくそうではあるまい。眼があつたら、モグラはしょっちゅう眼医者に行かなければならぬだろう。耳介(みみたぶ)もない。陰のうもない。体のでっぱりをなるべく少なくしているように見える。一方、モグラのくちびるは二重になっていて、口の中に土が入るのを防ぐ。頭や手には、たくさん長い触毛が発達し、おそらく、獲物をとらえる一助となっているのだろう。

特殊な環境にすみ、特殊な体形をもつた、この動物に、人間は何か特別な習性を考えずにはいられない。モグラは太陽にあたりと死ぬ。これが事実なら、モグラは光に對して、最も敏感な動物ということになる。もつと、もつともらしい話に、モグラは4〜5cmの厚さの土を通じて、ミミズの臭を感じ、これを獲える々というのがある。これは、めくらのモグラだからこそ、と嗅覚に期待をかけたための誤りであるらしい。東京の郊外には、こんな面白いつたえもある。竹林に馬のツメをまいておくと、モグラが集ってくる。本当かどうか、まだたしかめていない。

日本には、北海道をのぞく各地に、こんな

モグラが何種か棲息している。モグラの多い国のうちである。以下、モグラの生活を紹介したいと思う。

モグラは、海近くの砂丘から、高山の山頂まで、土らしいもののあるところなら、ほとんどあらゆる場所にすんでいる。大都會の小さな公園に生残っている最後の野生動物でもある。モグラは環境を自分でつくる。地中にほりぬかれた彼らのトンネルは、一種の街である。この街は、半永久的に代々うけつがれ維持されてゆく。私たちのふだんみかけるモグラのトンネルはしょっちゅうこわされる畑のものである。だから、私たちは、モグラといえは年がら年中トンネルをほっている動物と思いがちであった。同時に、餌となる動物も、そうすることによって獲えるのだと考えられてきた。しかし、森林のモグラを調べた最近の研究によると、事実はそうではないらしい。

トンネルは、地下のいろいろな深さに、ふつう、2〜3層になってつくられ、それらはまた上下に走るトンネルによって結ばれている。一点のよれもなく、みごとにはえそわつていた芝生に、ある日突然、モグラ塚がいくつも出現することがある。持主は青くなつて、モグラたいじを考える。いろいろ試み、効果が上らず、悩んでいるうちに、いつの間にか、モグラ塚は芝生の間に消え、持主もモグラを忘れてしまう。しかし、よく考えてみると、こんなことは毎年同じ頃に起っているような気もする。

これと2〜3層になったモグラのトンネルと関係があるのである。モグラのトンネルは一種の「ムシとりわな」である。土の中にす

むミミズや昆虫の幼虫たちが、トンネルの中にはいだしてくる。それを、モグラは、巡回しながら食べるわけである。ところでこの土の中のムシどもは、冬になると土中深くもぐり、季節的な移動をする。それにしたがって、いままで上層のトンネルをもつばら使用していたモグラも、冬になると下のトンネルへと移り住むわけである。このとき、くずれおちていた土は、おし、あげられ、地上へモグラ塚として放出される。

このように、モグラの餌のとり方は、今まで考えられていたよりは、ずっと楽である。じつさいモグラの手の指を切つて土を掘れなくし、トンネルに放し、それでも生きてゆけることを証明した人もいる。飼育下でみられるモグラの餌のさがし方も、これを支持するようである。モグラは、ミミズをやればもちろん餌であるが、ひき肉等でも飼うことができる。肉を飼育箱に入れてやると、モグラの鼻が予想外に悪いことがわかる。体にふれてさへも、わからず、ぐうぜん餌の上に口がいつて、あわてて食べだしたりする。ところが、獲物の動きまわる音にはよく反応するし、土についた臭のあとをたどるのも上手である。先にのべた触毛は、獲物の動きを知るのに役立つらしい。こうした能力は、トンネルに

入りこんだムシがたてる音や、つけた臭のあとをたどって、それを獲えるのには大変便利である。しかし、トンネルをほりながら餌を捜すには、あまり役立たない。

こうして、トンネルで生活しながら、春にモグラは繁殖期をむかえる。このころ、雄はきわめて活ばつに動きまわり、わなをかける。雌の3倍もとれたりする。一直線にトンネルをほつたりするのも、このころである。雄



どうしの斗争もさかんに行われるらしく、体のあちこちに、大きな傷をつけたモグラがつかまる。雌は、トンネルの土中に、新しく直径20cm位の穴をほり、地表から木の葉などを運んで、ボール状の巣をつくる。この中に、2匹〜5匹、ふつう4匹のピンク色をした赤ん坊がうまれる。2週間ほどで毛が生えはじめ、耳が開く。3週間たてば、もう毛が生えそろう、体重も、親に近い。そして、5月下旬から、6月にかけて、巣立ちがはじまる。

この頃が、モグラの一生のうちで、最もきびしい時である。体の大きさは、親と同じ位になつていても、筋肉は、まだ弱々しい。巣立つた子供たちをむかえて、単位面積あたりのモグラの個体数は、それまでの3倍位になるとうぜん、トンネルの街からあふれるモグラがでてくるはずである。力の弱い子供たちは追い出され、彼らは林床にたまった落葉や、コケの下で生活することになる。フクロウやイタチ、アナグマ等の天敵におそわれる機会、トンネル内の何倍も多いことだろう。子供たちは、秋頃になって、やっとトンネルの街に入れるようになるらしい。

こうして生活を送っているモグラの平均寿命は、一年位である。私たちの常識からするとひどく短く思われるこの命も、小動物の世界では決して短いものではないむしろ長い方である例えば、ドブネズミの年間死亡率はある調査では、99%であった。一年間生きられるネズミはわずか、千匹につき二匹にすぎない。モグラの天敵は、先にのべた動物の他、キツネ、オコジョ、等、主に地上棲の動物である。だから、いったんトンネルの街に安定した位置を占めてしまえば、かなり安全な生活を保証されるのであろう。

モグラの街は、他に多くの小動物によって利用されている。ヒメヒメズ、ヒメズ、ヤマネ、ヤチネズミ、トガリネズミ等が、その利用者である。彼らは、自分自身のトンネルもつくるから、森の地下は、小動物の一大王国でもある。

(長岡市立科学博物館・学芸員)

失なわれゆく自然

(2)

千葉 杉司

追いつめられる鳥獣

カモシカの密猟事件で長野県下でも何人かの猟師が検挙されてから数年、ある地方では植林した山麓に、又地元の大町でも高瀬川原にその足跡を記しており、多量なりともその数は増えつつあるものと思われる。

しかし、その反面ある地方では今まで生息していたカモシカがある日突然その姿を消しそのアゴの骨だけが発見されたりしている。一方野鳥の方は「一昔前に比べ数が少なくなった」という声を各地で聞く。たしかに私の幼ない頃には、マヒワ、イスカ、キレンジャク、ヒレンジャクの数百羽、多い時には千羽近くの群が見れたものである。

今では十羽、二十羽の群がせいぜいである減少の原因はどこにあるのだろうか。冬鳥の彼等の繁殖地であるシベリヤ方面での問題もあろうかとも思うが、日本における山林の伐材、農業散布による昆虫等の激減、密猟がその数を減らした原因の大きな部分を占めると思われる。

ハンターは年々増え、銃器はますますその精度を高めており、山野を棲家としている鳥獣にとつて発見されることは、死を意味するといつても過言ではあるまい。

ハンターの中には不心得者が数少なくない動くものは見つけ次第発砲し、ウマとクマを間違えて撃つた例さえある。

これらの鳥獣を保護するものに、狩猟法があり、天然記念物に対しては文化財保護法がある。しかし、これ等の法も捕獲禁止等の消極的なものである。捕獲ばかりでなく毎年県

が放鳥しているキジについてもハンターの増加等を考慮に入れると大海に小石をほうり込む程度である。

現況からみて、山林の伐材、農業散布等のことを総合的に考慮した、鳥獣保護計画を国県は早急にたて実施しなければならぬと思ふ。

農業の問題では日本に残り少ないコウノトリが良い例である。農業に汚染された餌のため水銀中毒にかかり、その生存については殆んど絶望視されている。いふなれば人工的に絶滅の道に追い込んでしまったのである。

又許せないものに密猟がある。愛玩用に二羽捕獲するのはご愛きようとしても、食用として大量に捕獲するのは許せない。

以前にも本誌に書いたが「焼鳥」が依然として市中に出まわっている。年末、年始の宴会には必ずといって良いほど膳に乗っている食べる方も無頓着としか思えないが、出す方は余り良い事ではないと感じているらしく聞くとき「スズメです」と小さな声でいうこんな大きなスズメは見た事がないと言つても答へは返つてこない。

料理店の地元の取り締りが厳しいと、他地域から輸入される。

羽毛つきのまま輸入して発見されたこともあるためか、赤裸に羽毛をむしり取つたものが輸入される。一見したところでは見当つかない。輸送手段も手が混んできたものであるが、需要が減らない限り、種々の方法がまだまだ考えられることだろう。

現状のままで五十年、百年後にはトキ、コウノトリの後に続く種類が出るに違いない。

その時になって「〇〇に救いの手を」とマスコミをはじめ大ききわぎをして、キャンペーンをはるやら、関係機関への陳情やら……その時では遅いのである。何かが起つてしまった後に大あわてで策をこころずる。日本人の悪いクセである。

例え一種でも将来絶滅に類したならば、その責任は無頓着、無施策の日本国民全部にある。

自然は一度破壊してしまつたら、元にかえるのに永い年月を要する事は衆知のとうりである。

だが、一度絶えてしまつたものは何百年たとうとも元には戻らないのである。日本には昔からのことわざに「転ばぬ先の杖」というのがある。

国、県、国民全部がこころもう一度、あらためて自然の保護について真剣に考え、検討して、早急に新しい救いの手をのべるべきではないだろうか。

現在に生きる我々は、これらの自然を絶やすことなく未来に引き継ぐ義務がある。

後に憂いを残すことのないよう国民の一人一人が努力すべきである。



エサ台にきたカケス

上高地冬の動物とその足あと

(1)

ノウサギとエチゴウサギ 坂田 尚

山岳地方の自然界で他の動物たちにくらべ野兎と共にその繁殖率のきわめて高いものに齧歯目うさぎ科に属する、トウホクノウサギとその亜種のエチゴウサギがある。(今泉吉典・哺乳動物図説による)

これら両者は山岳地帯において年毎に思う存分の繁殖を示しているのは事実である。中部山岳国立公園上高地周辺をその一例にとつても繁殖環境の広範囲な自然は彼等にとつて最も生活に適した場所となっている。ここには彼等の食餌である草根樹枝が自然の姿で山一帯に保護されているからである。



ノウサギ

前記のうちノウサギは腹部の一部をのぞき全身茶カッ色で頭胴四〇〇ミリ歯数は二十八個が普通であり、またその分布については山麓から標高二〇〇〇米内外に広く水平的な棲息状態を示している。上高地付近では梓川水系を中心に左岸右岸に自然分類され、ノウサギの場合は左岸寄りの草本潤葉樹林帯及び霞沢岳、六百山、徳本峠、大滝山など、南稜山系一帯に広く分布しその数も後者に比べはるかに多い。

またエチゴウサギは梓川右岸の焼岳、西穂高、奥穂高、前穂高、明神岳など標高二九〇〇米位までの草本灌木帯に生棲し高所の岩穴に巣づくりし、その行動範囲はきわめて広い、エチゴウサギはノウサギに比べその体も一回り大きく頭胴四五〇ミリ歯数二十八個後足はノウサギより長く行動はより敏捷である。両者ともに六月頃と九月頃の年二回の繁殖期に一産二―三仔を産むが、他族との交尾はしないようである。

これら推定数百匹ものノウサギが夕暮から早朝に採食と運動をかねて山林から梓川の平地にかけて行動する。冬の積雪期に彼等は無数の足あとを雪の上に残し梓川ぞいに群生している天然記念物指定のケシヨウヤナギの幼木小枝またミヤマハンノキ、カラマツの幼木の樹皮を喰い荒し、その動作はきわめて活発であり一夜に数十キロも行動するが帰路もほとんど同じみちをもどる習性がある。

交尾期以外は雄雌ともに単独行であるが、ときには雪原に幾匹もの群が遊ぶこともありその様子は雪の上に残された彼等の足あとがはつきりと物語っている。足あととは四点で後足が先に進行方向に向い二点ぶつ横になり、

前足は縦に二点規則正しく並ぶことはエチゴウサギも同様である。春から夏にかけて食草の豊富な季節にはたまたまブーツユ中で仮眠することもあるが天敵に対する警戒心は驚くほど敏感であり、その逃げ足はまことに速いエチゴウサギの冬季の食餌は、ダケカンバの実とその小枝が好物であり、風雪のない静かな夜を選んで高所の岩穴から、ノウサギ同様に梓川周辺まで広範囲に行動し、積雪の中からクマザサを掘り出したケシヨウヤナギの小枝なども好んで喰べる。夏季のエチゴウサギの体毛はノウサギとほとんど変らないが十月中旬ごろから冬毛に変色しはじめ、十二月上旬から翌年の四月まで両耳の先端を残して完全な保護色となるが目の色だけは黒褐色のままである。

両者とも夏から秋にかけてそのほとんどのものに、両耳から頭部、頸部のあたりに大きき二ミリから五ミリ位のササダニが皮膚内部まで付着している。また二年以上の親ウサギの肝臓を調べてみると、直径五ミリから八ミリ位の大ききで円型をおびた半透明のものでその一部が乳白色であり、全体に固質の物体が寄生している。この小動物は肝臓に寄生しているジストマの一種であるが、その感染経路は不明である。彼等の天敵はこの地方に棲息するキツネ、テン、タヌキ、タカなどであり冬ウサギの足あとを執念深く追っているキツネの足あとを雪の上に見かけると、自然界における生存の厳しさを見せつけられた思いである。



ノウサギの足跡

お願い 「山と博物館」の購読者をつのつております。年間三〇〇円(送料共) 大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明
 飯鬼岳よりの雲海
 撮影 西沢正浩

山と博物館 第13巻第1号
 一九六八年一月二十五日発行
 発行所 長野県大町市
 電話(大町)二一〇二二一
 大町山岳博物館
 印刷所 大町市下仲町
 大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)

(明科フイッシングランド鳥獣飼育係)